

高大接続改革をめぐる動き（Ⅱ） Movement involving Connection Reform between Upper Secondary Schools and Universities（Ⅱ）

西辻 正副
Masasuke Nishitsuji

キーワード：（高大接続システム改革）（大学入学希望者学力評価テスト）（記述式問題）

1 研究の目的

「高大接続改革をめぐる動き（Ⅰ）」（『人間教育学研究』第3号（人間教育学会））では、高大接続システム改革会議「中間まとめ」（平成27年9月16日）（以下、「中間まとめ」という。）段階での状況について考察した。これを受け、本稿では、それ以降の動き、特に平成27年12月22日に開催された「高大接続システム改革会議（第9回）」の配付資料（以下、「第9回資料」という。）として公表された、『『大学入学希望者学力評価テスト（仮称）』で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】』（以下、「問題イメージ」という。）等を踏まえ、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」において、大学教育を受けるために必要な能力としてどのような力を評価しようとしているのかを、国語を中心に考察する。

2 「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」で評価しようとしている能力

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」（以下、「大学入学希望者テスト」という。）は、大学入学を希望する者を対象に、これからの大学教育を受けるために必要な能力について評価することを主たる目的としている。このテストでは、十分な知識・技能が習得されていることを前提に、思考力・判断力・表現力等も評価することになる。

「中間まとめ」をみると、先行調査で評価しようとしている能力等（思考力・判断力・表現力等）として、特定の課題に関する調査（論理的な思考）【国立教育政策研究所】、全国学力・学習状況調査【文部科学省】、PISA調査（3分野及び問題解決能力調査）【OECD】が例示されていることから、新たな「大学入学希望者テスト」の枠組みづくりの中では、これらが参考とされていることが分かる。「大学入学希望者テスト」で評価する能力について、「中間まとめ」では、「今後の社会の在り方・変容を踏まえれば、大学における学修や社会生活において、主体性を持って多様な人々と協力して問題を発見し解を見いだしていくために必要な、以下のような思考・判断・表現等を行えるかどうかますます重要となる」として、次の3点を例示していた。

- （1）現在の状況から問題を発見・定義し、必要な情報を収集して解決のための構想を立て、計画を実行し、結果を振り返って次の問題解決につなげること（問題発見・解決とメタ認知）。
- （2）問題発見・解決のプロセスの中でも、特に以下のような思考・判断・表現等が行えること。

- ① 推論、仮説の形成、② 学習を通じた創造的思考、③ 適切な判断・意思決定、
 - ④ 相手や状況に応じた表現や構成
- (3) 問題発見・解決のプロセスを、主体的に実行するだけでなく、他の考え方との共通点や相違点を整理したり、異なる考え方を統合させたりしながら実行していくこと。(cf. PISAの協同問題解決)

この内容について更に検討が加えられ、「第9回資料」では、今回の「問題イメージ」の前提となる「大学入学希望者テスト」で評価しようとしている能力、言い換えれば、大学教育を受けるために必要な能力として、「主体性を持って多様な人々と協働しながら、問題を発見し、その解決策をまとめ、実行するために必要な諸能力」を措定している。そして、その能力を有しているかどうかを評価するために、次の点を重視することを示している。

- ① 内容に関する十分な知識と本質的な理解を基に問題を発見・定義し、
- ② 様々な情報を統合しながら問題解決に向けて主体的に思考・判断し、
- ③ そのプロセスや結果について表現したり実行したりするために必要な諸能力をいかに適切に評価するか

ここからは、各教科の知識をいかに効率よく評価するかという旧来の大学入試等の選抜試験の考え方を克服しようとしていることが分かる。

そして、「中間まとめ」で示されたものと同じく、問題発見・解決プロセスのイメージも示され、さらに、教科等ごとに、重視すべき学習のプロセスが例示されている。国語については次のとおりである。

多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握するとともに、他の知識も統合して比較したり推論したりしながら自分の考えをまとめ、他の考えとの共通点や相違点等を示しながら、伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法等を用いて効果的に伝えること。

「第9回資料」では、このプロセスにおける段階ごとの具体的な能力例が示されている。

まず、「多様な見方や考え方が可能な題材に関する文章や図表等から得られる情報を整理し、概要や要点等を把握する」ことについては、次の3つが示されている。

- ア) 与えられた文章や図表等の中から情報を収集したり取り出したりする力
- イ) 文章や図表等の情報を整理し、解釈する力
- ウ) 文章や図表等の情報を要約したり、一般化したりする力

同様に、「他の知識も統合して比較したり推論したり」することについては、

- エ) 目的に応じて必要な情報を見つけ出して文章や図表等の情報と統合し、比較したり関連付けたりする力
- オ) 得た情報を基に、物事を推し量ったり予測したりする力
- カ) 得た情報を基に、立場や根拠を明確にししながら、論理的に思考する力

「自分の考えをまとめ」ることは、

キ) 上記ア)～カ)のプロセスを経て、問題解決のための方法や計画（自分の考え）をまとめる力

「他の考えとの共通点や相違点等を示」すことは、

カ) 得た情報を基に、立場や根拠を明確にしながら、論理的に思考する力（再掲）

「伝える相手や状況に応じて適切な語彙、表現、構成、文法等を用いて効果的に伝える」ことは、

ク) 上記ア)～キ)のプロセスで得た情報を構造化し、目的や意図を明確にし、構成や展開を工夫して表現する力

ケ) 受け手の状況を踏まえて表現する力

コ) 表現した結果を振り返り、さらに改善する力

と整理されている。

ここに示されている力は、今回、突然出てきたものではない。これらの力については、表現は異なるものの、同様の内容が既に現行の高等学校学習指導要領国語（小学校・中学校学習指導要領国語も含む）で示されており、現段階においても、共通必修科目「国語総合」の履修終了時までには指導されていなければならない。そこで、今回示された「問題イメージ」では、「国語総合」の内容（指導事項、言語活動例）との関連も明示されている。

3 「大学入学希望者テスト」の作問の在り方についての考え方

現行の大学入試センター試験は、多肢選択方式で実施されている。この試験は、知識の習得状況の評価に優れていることに加えて、多肢選択方式という条件の下でも、与えられた問題を分析的に思考・判断する能力を評価することには優れているとされている。確かに国語においても、基礎的な知識・技能に加えて、一定の思考力等はみることができている。しかしながら、現行の大学入試センター試験において評価の対象となっているのは、問題文を読み、その範囲の中で選択肢の中から正しい答えを選択する力であることは拭いようがない。

現行の大学入試センター試験の国語における課題を整理すると、概ね次のとおりとなる。

- ・ 多肢選択方式という条件により、「読む能力」をみることに限定され、文章の内容や表現の仕方等を読み取ることが中心となりがちである（表現の仕方に関することは、学習指導要領上は「読むこと」の内容。）。その結果、表現する能力（話すこと・聞くこと、書くこと）を評価することができていない。
- ・ 近代以降の文章として「文学的な文章」、「論理的な文章」、古典として「古文」、「漢文」というように、「読むこと」の素材のみの形式（枠組み）に固定してしまっている。
- ・ 多肢選択方式かつ正解は原則1つ（いわゆる「準正答」を認めない）という条件により、受験者は正答を効率よく求めるという意識に陥りがちで、選択肢の内容を参考として解答するなどのケースもある。
- ・ 出題には、小・中学校の全国学力・学習状況調査のB問題等に見られるような、問題を発見し解決するプロセスなどの学習活動（言語活動）は取り入れられていない。

- ・ 統合的な、思考力・判断力・表現力をみることに弱い。 など

以上のような課題を持つ国語のみならず、各教科とも、多肢選択方式で実施されている現行の大学入試センター試験では、複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる思考・判断の能力や、その過程や結果を表現する能力の評価について課題をもっている。これらの統合的な思考力や表現力は、これからの時代において一層必要となるものであり、高校教育や大学教育において育成していくことが求められていることについては言をまたない。しかし、現状は、心ある教員による授業改善の取組は見られるものの、大きな流れとはなっていない。したがって、この状況を改善するためにも、「大学入学希望者テスト」は、これらの力を評価するものとなることが期待されている。

そこで、「第9回資料」では、「大学入学希望者テスト」について、次のような、作問上の留意点が例示されている。

(ア) 問題の質的改善による思考力・判断力・表現力の重視

例：複数のテキストや資料を提示し、必要な情報を組み合わせて思考・判断させる問題を出題

学んだ内容を日常生活と結び付けて考えさせるような問題を出題

連動型の選択式問題、答えが複数個ある問題を出題

数値や式を直接解答させるなど解答方法を工夫 など

(ア) では、素材、内容の改善に合わせて、正答を1つに限らない出題についても提言している。例示された事項は、いずれも、現行の大学入試センター試験をはじめとする大学入試問題、選抜試験問題の在り方についての意識、ひいては、高校の授業の在り方などを大きく揺さぶるものと言える。

(イ) 「統合的な思考力や表現力」をよりよく評価するため「記述式」を導入

- 複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめるための思考力・判断力やその過程や結果を表現する力などの「統合的な思考力や表現力」などについては、(ア) のような改善に加えて、記述式を導入して評価することが有効と考えられる。

(イ) では、記述式の導入を明確に示している。そして、記述式を導入する意義として次のような点を挙げている。これらは、記述式の利点として共通認識しやすいものとなっている。

- ・ 解答を選択肢の中から選ぶのではなく、自らの力で考え出すことにより、より主体的な思考力・判断力の発揮が期待できる。
- ・ 文や文章の作成を通じて思考のプロセスがより自覚的なものとなることにより、より論理的な思考力・表現力の発揮が期待できる。
- ・ 記述による表現力の発揮、特に文や文章の作成に当たって、目的に応じて適切な表現様式を用いるなど、表現力の発揮が期待できる。

この (ア)、(イ) が実現すれば、高校の授業は大きく変わって行くことになる。

ところで、今回検討されている「大学入学希望者テスト」など大規模な共通テストでは、採点が課題となる。そ

ここで、次のような提言も行われている。

- 共通テストとしての性格も踏まえ、当面、以下のような形で記述式の導入を検討してはどうか。
 - ・ 対象については、当面、高等学校で共通必修科目が設定されている「国語」「数学」とする。（特に記述式導入の意義が大きいと考えられる「国語」を優先させる。）
 - ・ 方式については、「自由記述式」ではなく、解答に当たって一定の条件への適合を求める「条件付記述式」とする。
 - ・ 条件設定については、①共通テストとしての採点可能性を高める観点、②問題を解決するための思考・判断・表現のプロセスで必要となる具体的な能力を評価する観点から行う。（教科の知識量を問うものにはしない。）
 - ・ 解答を求める字数については、当面は最大で300字程度までで検討。
 - ・ 実施に当たっては、採点基準の作成が不可欠。
 - ・ 試験時間や採点期間の確保のため、記述式については別の日程で実施することも含めて検討する。同じく民間との連携での実施を検討している英語（4技能）と同一日程での実施も検討する。日程については、高等学校をはじめ関係者と十分に調整する。
 - ・ 大学側の負担も考慮し、可能な限り民間の力を活用して実施することを検討する。

○ 対象教科

当面記述式を導入する教科として国語と数学が示されている。これには、両教科が高等学校の共通必修科目を設定していることが大きく影響している。共通必修科目は基礎的、総合的な科目であり、かつ選択科目の履修の前提ともなっていることから、ほぼ全ての高校において、第1年次あるいは第2年次で履修を終えているからである。それは、「採点期間の確保のため、記述式については別の日程で実施することも含めて検討」とあることとも関連している。

高校教員の中には、「第9回資料」を見て、「仮に年内に試験が行われるなら、もっと早く授業を進める必要があり、高校生活がさらに窮屈になってしまう。学校行事や部活が犠牲になるかもしれない」（「読売新聞」平成27年12月23日付け 朝刊）、「センター試験よりも前倒しされれば、部活動や文化祭など高校生活のサイクルを揺るがしかねない」（「日本経済新聞」平成27年12月23日付け 朝刊）、「高校で学ぶべき内容をすべて終えることができない」（「朝日新聞」平成27年12月23日付け 朝刊）などと発言している。ここに、意識改革が求められる課題がある。

現行の大学入試センター試験においても、国語の出題範囲は共通必修科目である「国語総合」のみである。「新テスト」においても出題範囲が変わらないとすれば、上述のコメントの「もっと早く授業を進める必要があ」る、「学ぶべき内容をすべて終えることができない」は、国語に関しては当たらない。

さらに、大学入試への対応は高校の通常の授業だけでは十分ではなく、いわゆる「入試勉強」「入試対策」という特別な準備を行わなければならないという呪縛から解放されなければならない。高校における学習指導の在り方を一層改善し、高校において日常の授業を積み重ねれば、「大学入学希望者テスト」にも、各大学の個別選抜にも対応できる学力を身に付けることができるという状況、意識を作り出さなければならない。そうなれば、「高校生活がさらに窮屈になってしまう。学校行事や部活が犠牲になるかもしれない」、「部活動や文化祭など高校生活のサ

イクルを揺るがしかねない」という発言もなくなるはずである。高校教員は、もっと日常の授業に自信をもつ必要がある。

筆者は、文部科学省教科調査官、視学官、主任視学官という立場にあったとき、高校教育の改革、授業改善に取り組んできた。しかしながら、知識の量に偏った「体系的な知識を注入する」型の学力や、主体的、能動的な思考力等を伴わない学力は通用しなくなっているのが社会の現状であるにもかかわらず、高校教育は、いまだに、知識の暗記・再生に偏りがちで、思考力・判断力・表現力や、主体性を持って多様な人々と協働していく態度など、「真の学力」が十分に育成・評価されていないとの指摘が多く、それを払拭できるように、高校教育を改善することができなかった。とりわけ大学入試のありようが抜本的に変わらないことにより、高等学校における学習指導の在り方が変わらない状況が続いているとの指摘は根強かった。さらに、その現状を、高校教育、大学教育の双方が、お互いの責任にしがちになってしまっており、肝腎の高校と大学の接続改革がなかなか進まないという悪循環にも陥っていた。

しかし、現在、国内外にわたり、今まで以上に大きな社会変化が起こっている。このことを背景として、上述のような「大学入学希望者テスト」の枠組み作りを確かに、速やかにやり遂げ、高校教育、大学入試の在り方を変えなければ、将来に禍根を残すという認識が高まっている。今一度、いわば背水の陣で抜本的に改革を進めていこうというのが、今回の取組であるということを確認しておきたいし、その実現を期待したい。

○ 記述式の方式

記述式の方式としては、「自由記述式」ではなく、解答に当たって一定の条件への適合を求める「条件付記述式」とすることが示されている。これは、記述式を大規模な共通テストになじませようとする工夫である。

「第9回資料」では、問題形式を「マークシート」、「一定の基準に基づき評価可能な記述式問題」、「創造性・独創性・芸術性等の評価も含む記述式問題」の3つに分けて整理している。これは、大規模なテストにおける採点の可能性を考慮したものである。そして、「マークシート」、「一定の基準に基づき評価可能な記述式問題」は共通テストになじむ問題、「創造性・独創性・芸術性等の評価も含む記述式問題（例えば、解答の自由度の高い記述式、小論文など）」は個別選抜になじむ問題と分類している。

その結果、「大学入学希望者テスト」の記述式は、「連動型複数選択問題+記述問題」、「短答式」、「条件付き記述式（説明・要約・作図など）」などの方式を採用することになる。これらの問題では、設問で一定の条件を設定した上で、それを踏まえて、結論や結論に至るプロセスを解答させることになる。現行の大学入試センター試験では全ての答えが特定される問題であるのに対し、この方式では、問題に対する解答が正しいかどうかだけでなく、問題に解答する上でのプロセスが適切に行われているかが問われることになる。具体的には、解答を自由に記述するのではなく、あらかじめ結論（複数となることも想定）を設定した上で、結論を導き出した理由、結論を導き出す思考のプロセスを説明することを条件とすることなどが考えられるとしている。そこでは、単に答えを出す力ではなく、問題文にある情報のみならず、幅広く情報を取り出し、その情報を統合し、比較する、関連付けする、推論する、仮説を形成する、吟味する等の思考・判断プロセスを経て、解答を構成し、表現する力が問われることになる。

結論を導き出す思考のプロセスについては、「中間まとめ」、「第9回資料」のいずれにもイメージ図が示されているが、まだ確定したものではないと思われ、今後、更に検討が進められていくと考える。このプロセスが明確になることで、「大学入学希望者テスト」の問題の姿も一層明らかになっていくはずである。

4 「問題イメージ」の特色と効果

「第9回資料」で示された国語の問題イメージは3例である。

いずれの例も、多様な見方や考え方ができる素材から構成され、答えは1つとは限らず、結論だけではなく、考えるプロセスを評価することができるものとなっている。

例1は、多様な見方や考え方が可能な、交通事故に関する3つの統計資料（グラフ）とこれに関わる高校生の会話を読み、情報を統合、分析し、自分なりの考えを構成し表現する問題である。具体的な問いは次のようなものである。

- 問1 Bさんは、下線部 (a)「つまり」以下で、どのような内容を述べることになるか。空欄アに当てはまる適切な内容を40字以内で書きなさい（句読点を含む。）。
- 問2 空欄イでCさんはどのように発言したでしょうか。あなたが考える内容を、80字以上、100字以内で書きなさい（句読点を含む。）。

いずれの問いも、統計資料（グラフ）を読み解き、話合いの筋道を把握した上で、統計資料を基に自ら仮説を形成することが求められている。特に、問2では、グラフとして与えられた資料以外の資料の内容を、既知の知識等を基に論理的に推測することも必要となる。さらに、聞いている人に伝わるように表現する力も必要となる。

例2は、3つの文章を読み、そこで語られている、どのような【状況】のときに、どのような【問題】が生じ、それは、どのように【解決】できるのかという、【状況】、【問題】、【解決】に関する共通点について考察し、お互いに連動する複数の選択肢群から各々一つの選択肢を選ぶとともに、それを踏まえた記述を行う問題であり、【状況】と【問題】の組合せに応じて、【解決】の方法について複数の解答が成立し得るものとなっている。具体的な問いは次のようなものである（著作権等の関係で、素材文は省略されている）。

問Aの文章のドイツの小説家、Bの文章のアメリカの小説家、Cの文章の日本の作曲家は、それぞれの世界で数多くの作品を生み出している。A、B、Cの文章に示されたこの3人の創作への取組姿勢には、共通するパターンがみられる。それぞれの文章では、創作への取組姿勢について、どのような【状況】のときに、どのような【問題】が生じやすいと述べているか。3人に共通する【状況】と【問題】の組合せを、それぞれの選択肢群から1つずつ選んで答えなさい。なお、該当する組合せは1つとは限らないが、あなたは組合せを1つ答えること。

次に、あなたが選んだ【状況】の下で生じやすい【問題】は、どのように【解決】できる（している）とそれぞれの文章では述べているか。3人に共通している解決法を、30字以上、50字以内で要約して書きなさい（句読点を含む。）。

【状況】

- ① 作品の締め切りが近いが、なかなかやる気が起こらない。
- ② 作品の制作に毎日取り組んでいる。
- ③ 作品をつくっているところを他の人に見られたくない。
- ④ いつもよりも難しい作品に挑戦するため、不安になっている。
- ⑤ 作品の制作が終了する時刻を決めることができない。

⑥ 作品についてすばらしいアイデアを思い付いている。

【問題】

- ① その日の調子がよいからといって無理をすると、翌日に悪影響が出てしまうことになる。
- ② 食事の前に比べて、食事を済ませた後は創造的な感覚が鈍りがちになる。
- ③ 制作のための作業だけをしては、毎日続けて制作を行うことは不可能になる。
- ④ 日々の気分や状況に流されてしまうと、コンスタントに成果を出すことができなくなる。
- ⑤ 制作することに集中し過ぎると体を動かさなくなり、体の調子が悪くなる。
- ⑥ 制作している途中で邪魔が入ると作業が中断してしまい、制作に没頭できなくなる。

この問いは、「中間まとめ」でイメージが示された連動型複数選択問題（仮称）に記述問題を加えたものである。「問題イメージ」では、【状況】、【問題】の組合せとして2つの正解例が示されている。このように、複数の正答があり得る問いを出題することは、答えがない問題に最善の解を導く力を評価することにつながる。【解決】の部分を含めて全て多肢選択にすることも可能であるが、この部分を記述式にしていることは、この意識の明確な反映と考えられる。

例3は、公立図書館に関し、その現状と課題のほか、若者の自立・社会参画支援を推進する場、家庭教育支援のための場、地域の人たちの対話や交流の場としての試みなど今後の公立図書館の可能性等について記した1,400字程度の新聞記事を、一定の目的に沿って読み取り、得られた情報を取捨選択したり、自分の考えを統合したりしながら、新たな考えにまとめ、200～300字で表現する問題である。具体的な問いは次のようなものである（著作権等の関係で、素材文は省略されている）。

問 今後の公立図書館の在るべき姿について、あなたはどのように考えるか。次の1～3の条件に従って書きなさい。

条件1 200字以上、300字以内で書くこと（句読点を含む。）。

条件2 解答は2段落構成とすること。

第1段落には、今後の公立図書館が果たすべき役割として、あなたが重要と思うものについて書くこと。その際、文中に示された公立図書館の今後の可能性のうち、今、あなたが重要と考える事項を一つ取り上げ、本文中の言葉を用いて書くこと。

第2段落には、仮にあなたが図書館職員だとした場合、図書館において、第1段落で解答した姿を実現するために、どのような企画を提案したいかを記すこと。

その際、企画の内容に加えて企画の効果についても記すこと。

条件3 本文中から引用した言葉には、かぎ括弧（「」）を付けること。

例1、2も、設問において一定の条件が設定されているが、例3は、より典型的な条件付き記述式となっている。条件付き記述式かつ200～300字で表現する問いとしては、例2のような文章の要約という形式も考えられるが、それではなく、「あなたはどのように考えるか」という問いを選択しているのは、読むという言語活動を与えられた文章の中だけに閉じ込めず、問題文の中にある情報のみならず、幅広く情報を取り出し、その情報を統合、分析し、思考・判断のプロセスを経て表現するという、オープンエンドな形を求めたからである。

なお、今回示された問題イメージは、いずれも「条件付き記述式」の考え方をモデル的に示すものであり、難易度も含めて、実際出題されるものではないと思われる。今後は、より実際の「大学入学希望者テスト」に近い問題例の公表が待たれる。

これらの「問題イメージ」に対して、「従来のセンター試験にはない出題だ。（中略）思考力や問題解決能力を育てたい文科省の方針が表れている。主体的な学びの方法として文科省が広める『アクティブラーニング』に対応したとも言えるだろう。（中略）短期間で身に付けるのは難しく、中学生ぐらいから訓練が必要だ。」（「朝日新聞」平成27年12月23日付け 朝刊）、「今回示された例題は、知識を単純に引き出したり、解法のパターンを機械的に活用したりして解ける問題ではない。文章を読み込んで分析し、推論するといったプロセスが必要で、小中学生を対象とした全国学力テストのうち知識の活用力をみるB問題を高度にした印象がある。こうした出題が新テストで定着すれば、生徒が主体的に課題を見つけ、能動的に解決する学習を後押しすることが期待できる」（「読売新聞」平成27年12月23日付け 朝刊 耳塚寛明のコメント）」という評価が見られた。全国学力・学習状況調査の問題が、小・中学校の授業改善を後押ししたように、今回の「問題イメージ」の公表、さらには、この趣旨を踏まえた「大学入学希望者テスト」の実施に向けた動きが、高校の授業の改善を大きく進めることは間違いない。

その一方で、「受験国語とは、出題された文章の中身について書くもので、自分の意見を書くものではない。」（「日本経済新聞」平成27年12月23日付け 朝刊 橋野篤のコメント）などという、旧来の考え方から逃れられない考えも見られた。「受験国語」という語を用いるところに旧来型の大学入試の意識が象徴的に表れており、このような意識を改革していくことも今後の課題となるであろう。

5 今後の見通し

モデル的とはいえ「問題イメージ」が公表されたことで、「大学入学希望者テスト」については、高大接続システム改革会議の本年度内での最終まとめに向けて、動きが加速すると思われる。今後、記述式の実施対象科目や字数、実施方法等について、関係団体等の参画も得て、採点や実施に係る技術の動向やコスト等も踏まえ、試行も行いながら継続的に検討が進められることになるだろう。

本稿では、取り上げることができなかったが、「問題イメージ」における数学の問題例は、事象から問題解決に必要な情報や条件を抽出・収集したり、仮定をおいて考えたりする問題が例示されている。具体的には、「スーパームーン」という日常生活の現象に関する記事を数学的に捉え、解答に至るプロセスを重視している。ここには、国語との共通点も見られることから、問題例の作成に関しては、教科を超えた連携も進めてよいと思われる。また、英語については、話す・書く・聞く・読むの4技能を評価するため、民間の資格・試験と連携すること、例えば、国が基準を示し、民間が作問（原案）・実施・採点を行う体制などが検討されることになるのではないと思われる。

今回、「問題イメージ」が公表されたことで、特に、実施時期、継続的な問題作成及び採点の可能性が話題となっている。また、採点の基準など、公平性についての発言も聞かれる。これらの点については、できるのだろうかというネガティブな議論ではなく、どのようにすればできるのかというポジティブな議論、高校教育、大学入試に対する意識改革を図る議論を期待したい。

参考文献

- 1 高大接続システム改革会議「中間まとめ」（平成27年9月15日 高大接続システム改革会議）

- 2 高大接続システム改革会議（第9回）配付資料（平成27年12月22日 高大接続システム改革会議）
- 3 「朝日新聞」、「読売新聞」、「日本経済新聞」（ともに平成27年12月23日付け朝刊 東京本社版）